



Patron Only (Extra +R18)

正直言って——
これまでも電車で
視線を感じることは
何度もあった

自分が目を引く
容姿なのは
わかっていたし

制服を着た若い
女の子に、男たちが
欲望を持つことは
知っていた……

涼宮ハルヒの
最終病の
電車2

がアッ……

がアッ……

がアッ……

でもそのことに
興奮していたかと
いうと……全然

そういうことに
興味もなかったし
……まあ、
ゼロではないけど

体育の授業前に
教室で無造作に
着替えたことすら
あった……



だから――
あの日……
自分から際どい
下着をつけて……

わざとパンツの
見えるような
短いスカートで
電車に乗った時は
本当にドキドキした

男の人の視線を
感じるたびに
全身が栗立つような
ゾクゾクする感じ

ドクンッ

ドクンッ

ドクンッ

（っ……
きたあ……♡）
痴漢はすぐに
釣れた

胸を揉まれながら
震える手で
短すぎるスカートを
たくし上げる……

（どお？
すごいでしょ？
この先、もっとすごい
ことだって……！）

ドックンッ

ドックンッ

ドックンッ



「朝はここまでだ」
そう言って、痴漢は
手を止めてしまった

(んなつ……
こ、これからなのに)
私の不満げな表情に
男は気付いて笑う

「今夜、最終電車——
この同じ車両に
乗ってこい……
最終痴漢電車に」

ドクン

ドクン

ドクン

電車を降りて
すぐトイレに
駆け込んだー
動悸が激しい

はっ
はっ
はっ

胸と太ももを
触られただけで、
もうアソコは
ぐちゃぐちゃに
濡れていた……

はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ

今夜だ。今夜、もっと
すごいことができる。
今夜、最終痴漢電車に
乗れば――

ふっ
ふっ
ふっ

ド
ク
ン
ド
ク
ン

ド
ク
ン
ド
ク
ン

ド
ク
ン
ド
ク
ン

そして今——
痴漢の男に言われた
ままに、最終電車で
乗り込んでいます

バカみたいに激しい
露出の服
ノーブラで乳首が
ピンピンに立って
いるのもバレバレ

ドキ

いっそ……
こっちから声を
かけてやろうかしら？
周囲を見渡すと——

ドキ

ドキ



「……そこのおじさん
よく朝見かける人ね」
目についた中年の
サラリーマン風の男に
声をかけてみる

「あたしと楽しいこと
しない？ここでは
アリなんですよ……
そういうの♡」

ばるん、と
胸をはだけて見せる。
男たちがゴクリと
生唾を飲み込む――

ドキ♡

ドキ♡

ゾクゾク♡

ゾク♡ゾク♡

ばるん♡

周囲では既に、
男たちに身体を
触られる女の子の
甘いあえぎ声が
響き始めていた

「あたしのこころ、
空いてるけど？」
そう言いながら
アソコを晒して
見せる――

中年サラリーマンの
股間がはちきれん
ばかりに勃起し、
私は座席に誘われた

ドキッ

ドキッ

ドキッ

くっ
くっ

くっ
くっ

くっ
くっ

くっ
くっ

身体が震える
心臓の鼓動が
高まる……

足をぱっくりと
開くと、
男たちの視線が
アソコに集まる

今からここに
入れるんだ……
しちゃうんだ
セックス……♡



「いいのかい？
入れちゃって」

「ここまできて
ガマンするなんて
無理でしょ？」

アソコを指で
拡げて見せる。
チンポがアソコに
あてがわれた。



入ってくるっ
入ってくるっ
おちんちんっ♡♡

女の子の大切な
場所に、中年男性の
黒ずんだペニス
が差し込まれていく

身体の中を
擦られる感触に
ぞわぞわと快感が
走る――



「あっ♡
あんっ♡
やあっ♡」

頭の中で火花が
弾けるような感覚。
セックスって
すごいっ……♡

「次は俺だっ……」
既に後ろには
ゴムをつけた男の
列ができていた。



「あっ、こら！
生はダメよ！
ゴムなしお断り！」

ん
ふっ

No!

「……持ってないの？
でもどうしても
やりたい？
……はあ
しよーがないか」



避妊具なしの
ペニスが膣に
突っ込まれる

(なにこれっ……
ゴムありよりも
気持ちいい……)

ぱんっ

ぱんっ

チンポの段差が
直に刺激して
くるっ……♥
ヤバいっ……♥

ぱんっ



「あー……
気持ちいい……
膣で出しても
いいかな？」

「ハア!?
ダメに決まってる
でしょっ……!!」

突然の言葉に
お腹がきゅんっと
反応してしまう

ぞくぞく

「いいじゃん
おじさんの子
産んでよっ
ハルヒちゃん」

「バカじゃないの
そんなことっ……
孕むっ……
なんてっ……♡」

すくすく♡

ぐちゅ♡

ぞくぞく♡

絶対ダメなのに
その可能性に
ゾクゾクと興奮
してしまうっ……

ぞく♡

ぞく♡



「あーもうっ！
わかったから
好きなだけ
出しなさいよっ」

男たちはうおお、と
声を上げて、
競って膣内射精を
はじめた

ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ

もーっ♡

もう、これじゃ
孕んでも誰の
子供か、分から
ないじゃないっ♡

それから——もう
何発出されたのか
わからなくなって……

ヘトヘトの
ドロドロになって
ようやく——
宴は終わった

多分……
ううん、間違いなく
人生で一番幸せな
一夜だった——



数ヶ月後――

「ハルヒちゃん
お腹大きく
なってきたねえ」

「でしょ？
今日も楽しませて
もらうからね
パパたち♥」

ぽ
こ
ん

誰に孕まされたか
わからないお腹を撫で、
涼宮ハルヒは今日も
快楽にふけるのだった

終。

正直言って——
これまでも電車で
視線を感じることは
何度もあった

自分が目を引く
容姿なのは
わかっていたし

制服を着た若い
女の子に、男たちが
欲望を持つことは
知っていた……

涼宮ハルヒの 最終電車





でもそのことに
興奮していたかと
いうと……全然

そういうことに
興味もなかったし
……まあ、
ゼロではないけど

体育の授業前に
教室で無造作に
着替えたことすら
あった……

だから――
あの日……
自分から際どい
下着をつけて……

わざとパンツの
見えるような
短いスカートで
電車に乗った時は
本当にドキドキした

男の人の視線を
感じるたびに
全身が栗立つような
ゾクゾクする感じ

ドクンッ

ドクンッ

ドクンッ

（っ……
きたあ……♡）
痴漢はすぐに
釣れた

胸を揉まれながら
震える手で
短すぎるスカートを
たくし上げる……

（どお？
すごいでしょ？
この先、もっとすごい
ことだって……！）

ドックンッ

ドックンッ

ドックンッ

電車を降りて
すぐトイレに
駆け込んだー
動悸が激しい

胸と太ももを
触られただけで、
もうアソコは
ぐちゃぐちゃに
濡れていた……

今夜だ。今夜、もっと
すごいことができる。
今夜、最終痴漢電車に
乗れば――



そして今——
痴漢の男に言われた
ままに、最終電車で
乗り込んでいる

バカみたいに激しい
露出の服
ノーブラで乳首が
ピンピンに立って
いるのもバレバレ

いっそ……
こっちから声を
かけてやろうかしら？
周囲を見渡すと——



「……そこのおじさん
よく朝見かける人ね」
目についた中年の
サラリーマン風の男に
声をかけてみる

「あたしと楽しいこと
しない？ここでは
アリなんですよ……
そういうの♡」

ぱるん、と
胸をはだけて見せる。
男たちがゴクリと
生唾を飲み込む――



周囲では既に、
男たちに身体を
触られる女の子の
甘いあえぎ声が
響き始めていた

「あたしのこころ、
空いてるけど？」
そう言いながら
アソコを晒して
見せる――

中年サラリーマンの
股間がはちきれん
ばかりに勃起し、
私は座席に誘われた



身体が震える
心臓の鼓動が
高まる……

足をぱっくりと
開くと、
男たちの視線が
アソコに集まる

今からここに
入れるんだ……
しちゃうんだ
セックス……♥



「いいのかい？
入れちゃって」

「ここまできて
ガマンするなんて
無理でしょ？」

アソコを指で
拡げて見せる。
チンポがアソコに
あてがわれた。



入ってくるっ
入ってくるっ
おちんちんっ♡♡

女の子の大切な
場所に、中年男性の
黒ずんだペニス
が差し込まれていく

身体の中を
擦られる感触に
ぞわぞわと快感が
走る――



「あっ♡
あんっ♡
やあっ♡」

頭の中で火花が
弾けるような感覚。
セックスって
すごいっ……♡

「次は俺だっ……」
既に後ろには
ゴムをつけた男の
列ができていた。



「あっ、こら！
生はダメよ！
ゴムなしお断り！」

アッ
ッ

NO!!

「……持ってないの？
でもどうしても
やりたい？
……はあ
しよーがないか」



避妊具なしの
ペニスが膣に
突っ込まれる

（なにこれっ……
ゴムありよりも
気持ちいい……）

はん

はん

チンポの段差が
直に刺激して
くるっ……♥
ヤバいっ……♥

はん

「あー……
気持ちいい……
膣で出しても
いいかな？」

「ハア!?
ダメに決まってる
でしょっ……!!」

突然の言葉に
お腹がきゅんっと
反応してしまう



「いいじゃん
おじさんの子
産んでよっ
ハルビちゃん」

「バカじゃないの
そんなことっ……
孕むっ……
なんてっ……♥」

すちゅっ

すちゅっ

絶対ダメなのに
その可能性に
ゾクゾクと興奮
してしまうっ……

「あーもうっ！
わかったから
好きなだけ
出さないようっ」

男たちはうおお、と
声を上げて、
競って膣内射精を
はじめた

もーっ

もう、これじゃ
孕んでも誰の
子供か、分から
ないじゃないっ♡

それから——もう
何発出されたのか
わからなくなって……

へトへトの
ドロドロになって
ようやく——
宴は終わった

多分……
ううん、間違いなく
人生で一番幸せな
一夜だった——

ドクンッ

ドクンッ

ドクンッ



数ヶ月後――

「ハルヒちゃん
お腹大きく
なってきたねえ」

「でしょ？
今日も楽しませて
もらうからね
パパたち♥」

ポーン
ポーン
ポーン

誰に孕まされたか
わからないお腹を撫で、
涼宮ハルヒは今日も
快楽にふけるのだった

終。